

何日か歩いて着いた所は引揚げ船に乗るテントのある港でした。そこで、麦だけの御飯をもらい食べることができました。そのおいしかったことは未だに忘れません。

博多港沖についたら、船内にコレラの患者がいるというので、船に乗ったまま二十一日間も上陸できませんでした。検疫を受けてようやく祖国の上をふむことができた喜びもつかの間、連れてきた三歳の子どもが、はしかになり博多国立病院に二週間入院。

私の母に迎えられて大船渡線の汽車に乗ったとき、これで、ぶじ生きて帰れたんだなあーとしみじみ思い、力の抜けていく感じが四十数年たった今でも、この間のできごとのように思えてなりません。

今、わたしは背中に背負いくぐり抜けた四十三歳の息子、嫁、孫たちに囲まれて、ほんとうの平和の時代をかみしめています。

残留し、病弱者の輸送に

福島県 藤田 昭一

陸軍省の文官であった父が、満州の司令部へ転任するにあたり、満州を墳墓の地とすべく家族同行し、昭和十一年春からハルビン市に居住していた。私は昭和二十年春から、六百キロ南下した遼陽の関東軍部隊に学徒動員で入隊中であつたので、終戦時は進駐してきたソ連軍に無条件降伏、武装解除となつた。

将校はシベリアへ連行され、兵および学徒はその場に収容され、粟粥と乾パンの抑留生活が始まつた。その間、学徒たち数度にわたる収容所脱走をはかり、三々五々収容所を抜け出し、それぞれ親もとへとたずね歩いた。

その後、おたがいめぐりあうことはなかつた。私は十二月に収容所を出たのち北上し、ハルビン市の家族をたずね、収容先の家族とぶじ合流することができた。戦後は、家族一人ひとりが食するために稼いだ。土木作業や

積荷作業の日雇い人夫、ヤミ煙草を製造し、ソ連軍相手に立ち売りしたり、朝鮮アメを仕入れ、手製の手押車での街頭販売などその日暮らしの生活が続いた。その間、わずかばかりの身のまわりの品まで幾度か没収されたが、なんとか食をつなぎ、身を保っていくことができた。

翌二十一年八月下旬、内地引揚げが始まったが、私は使役として一人残留することになった。私を除いた家族四人は、リュックサックに食料等を詰めこみハルビン市を出発した。引揚げ途中は他の皆さん方と同様で、引揚げ列車の貨車内では毎日毎晩、不安と不眠の連続、あっちこっちへ停車したり、そのうえ、下車させられては徒歩行進。身体の弱ってきた人達は、落伍しないようにと背負っている荷物を放棄しつつ歩く。あげくのはてには野宿となり、ナマ米をかじり、雨水でのどをうるおし、川での行水など、眠れぬ夜を過ごしながら南下し、錦西の収容所に集結。コロ島港から出港する引揚げ船を待ち乗船、博多港上陸まで一か月余かかり、義父の郷里福島県へと向かったということだった。

一方、残留した私は難民収容所へ行き、病弱者の引揚

げ準備を整え、九月初めに出発、担架隊員として病弱者の担架輸送にあたることになった。貨車は棺桶を積み、続出する死亡者の処置をしながらの引揚げである。汽車不通地では、荷物を背負って病人を担架で運ぶ徒歩行進。野宿も病弱者を抱えての不安な夜を明かし、体力に減退を感じつつも頑張りながら南下した。錦西の収容所に集結後、コロ島港から乗船した。なにしろ病弱者を抱えた船であるから、毎日のように水葬が行われ、また、コレラ発生で毎日検便のうえ沖へ隔離される状態であった。ハルビン市を出発してから一か月半、ぶじに担架隊として病弱者の輸送任務をまっとうし、博多港に上陸。先に帰国した家族がいる福島県へと向かったのである。

開拓団員のために私を捨てて

福島県 塩 沢 直 利

私は、農家の四男として生まれ、小学校卒業後、店の番頭見習いとして入店した。そんなわけで農業の経験な